

第21号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十六年二月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

さんまの蒲焼	魅華	1
ふるさと	ゆきんこ	3
随筆 五編	小野村 新	6
「祖父と大八車」	胃弱亭 骨人	16
翼をなくしたべガサス	高阪博一	23
美しい日々を願う	明花	34
詩 三編	大西隆史	37
蒼天は大島へ飛翔する	石川希理	43
出会いと別れの繰り返し	大西裕子	49
俳句 霜の朝	夏子	50
シヨートシヨート二編		51
編集室から		57

さんまの蒲焼

魅華

主人は味オンチのところがある。ある日牛肉料理を出すと「これは豚肉か？」と聞く。

「がっかり」高いお肉だったのに……

そしてこの前もししやもを焼きながら他のことをしていると、うっかり焼きすぎてしまったことがあった。歯ごたえのあるししやもだと、心の中で思いながらテーブルに置いた。ビールを飲みながらつまんでいる。

「硬！」と言われるかなと思いきや何も言わず、平らげた。

それに気をよくした？ 私は、土用の丑の日にスーパードウナギを眺めていた。

いざ買おうと思うと国産は根が張るし、中国産は国産に比べて安いのだが拘って買えない。迷っている私の目に留まったのは、さんまの蒲焼だった。見た目はウナギの蒲焼そっくり。これこれと思いかごに入れた。

「ねえ、これ何でしょ？」

「蒲焼だろ」

「そお、蒲焼、お味は？」

「さんま」

ピンポン！！と言ってる場合じゃない。ここまでするのはよくなかったと思った。しかし主人は土用の丑の日にさんまの蒲焼でも、文句ひとつ言わない。有難い。

そんな主人だが美味しい物は食べたがる。テレビでパエリア、ブイアベースと聞くと

作ってくれと言う。「ハイ、ハイ」と言いながら
らついつい後回しにする。

殊に主人と二人暮らしになつてからは、
体に良い食材を選び煮物・和え物・魚・肉な
どのお惣菜を作る、健康志向になつた。

それでもたまにはリクエストに応えなけ
ればと思い、作つたのがポトフだつた。

「美味しい。変わったものを作つたな」と褒め
てもらふ。その時は「次はパエリア作るね」と
張り切る。食べる方の身になれば、変化のあ
る食事の方が楽しいはずと考えるこの頃で
ある。

でもパエリアを「これなんだ？」とは言わ
ないでね。

※短いテンポで小気味よくまとまつた作品です
ね。いいものだと思います。ご主人の「サンマの蒲
焼き」に手を伸ばす様子が思い出されて、思わずニ
ヤリとしてしまいました。行あけと「感嘆詞」のあ
との一字開け、段落の設定のみ校正しました。

― 石川 希理



ふるさと

ゆきんこ

スーパーを歩いていると、「お土産に」と書かれた箱入りのお菓子が並べてあった。

手みやげか……主人の両親が生きていた頃はお正月はもちろん、五月の連休そしてお盆と帰省していたことを思い出した。お墓をこちらに建てたこともあつて、故郷の島根県に足を向けることもなくなつた。

あの頃が懐かしい。お盆に帰るとお線香の香りが部屋中に漂い気持ち落ち着いた。夏祭りに子供を連れてヨーヨーつりや、金魚すくいを楽しんだ。アイスクリームを食べながら露店を見て回つて、帰ると庭で花火をした。そして毎年海で思いつきり泳い

だり、遊ぶのが子供たちとの楽しみでもあつた。楽しかった夏の思い出、娘たちの心にもきつと残っていることだろう。

故郷はいい。私の故郷は山口県、秋吉台・秋芳洞にほど近い山間の地域。家の前には澄んだ水の流れる川があり、夏にはホテルが飛び交う。冬は一面銀世界となる。軒にはつららができ、水たまりには氷がはる。小学校の頃はそれを足で割りながら学校に通つた。

いつかどか雪が降つた年があつた。兄とかまくらを作ることを思いつき、二人で雪を固めて、固めて苦心しながら形にしていた。なんとか、一人入れるくらいの大きさのかまくらができ歓声をあげた。家からお菓

子や飲み物を持ってきて代わる代わる中で食べた。普段食べる味より格別だった。

春には山道を歩きながら、わらびやぜんまい、つくしを取りそれが夕飯の一品になった。よもぎでおだんごも母は作ってくれた。添加物の入っていないそのおだんごは子供にも美味しく感じられた。

秋には友達と遊びながら、栗ひろいをした。木をゆすつて栗を落とし、靴で中身の栗を取り出す。最初はうまくいかなかったが、だんだん慣れてくると上手く取り出せるようになった。

今と違い当時は四季がはつきりしていた。季節ごとの楽しみがあり自然の中で育つたことを、今この年になつて幸せだつたと思う。もう何十年も前になるが、娘たちを連れて

行つたことがあつた。

いつか孫たちを連れて行つてあの自然を見せてやりたい。そして一緒に楽しみたいねと主人と話している。

※懐かしい感じが溢れる小品ですね。かまくらは私も旅行中に作つたことがあります。私には故郷がありません。それは頭の中に幻影として作り上げられたものです。でも読んでいて、そうだなあと思いました。

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土の乞食となるとも

帰るところにあるまじや

ひとり都のゆふぐれに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

室尾犀星

ふるさとの訛りなつかし停車場の人ごみの中にそ
を聴きにゆく

石川啄木

故郷は心の中に秘めているものなのか。
でも、「都市難民」の私としては、山や河に囲まれ
た生き方もしたかったなあという願望も少しあり
ます。

― 石川希理



隨筆 五編

小野村 新

『外国文学の古典を読もう』

外国文学の古典の新訳本が話題になっている。龜山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』（光文社古典新訳文庫）は、五十五万部を突破するベストセラーになっているそうだ。残念ながら、私は『カラマーゾフの兄弟』を完読したことがない。この小説のように、読み始めて途中で挫折した外国の小説は多い。高校一年の夏休みに挑戦したリルケの『マルテの手記』、大学の授業で薦められたブレウオーの『マノン・レスコー』等。途中で読みさしにした外国の小説は他にも数多くある。『赤と黒』・『白鯨』・『城』・『チポー家の人々』――。

読了できなかつた理由は、それらの小説の長すぎる分量と難解さにあつた。

私が最も多くを読んだ作家は、サマセット・モームとアルベール・カミュである。サマセット・モームは、我々読者を飽きさせない技法を持つているから、どのような作品でも最後まで読み通すことができた。最も印象に残っている作品は、『人間の絆』である。二十歳の頃にこの長編小説を読んで、自身の人生観が変わつたという思い出がある。青春時代特有の破滅的な人生に共感するといつた考え方が払拭されて、平凡な幸せを求めて生きるこそが人生の喜びなのだということを悟つた。『人生絵模様』という言葉が印象に残っている。穏やかな上質のハッピーエンドが私の若い精神にもたらしたものは、大きかつた。アルベール・カミュとは、映画で出会つた。大学に入学した初夏、暇つぶしのために入つた池袋の文芸座（この映画館では入場料百円で洋画の名作を観ることができた）で、『異邦人』（ルキノ・ビスコンティ監督）を観た。主人公ムルソーを演じていたマルチェロ・マストロヤンニのモノローグが、い

つまでも私の耳に鳴り響いて消えないほどの感動を受けた。

帰途、『異邦人』（新潮文庫）を購入した。この小説は、映画そのものだ。至る所で、映画のシーンが蘇った。省略の効いた乾いた文体。アルジェの海と太陽、恋、殺人、そして、死刑の宣告。人間社会に存在する不条理がテーマのこの小説を、映画のせいか、ロマンチックな恋愛小説として読んだのであった。その後、『シーシュポスの神話』『ペスト』『転落』や、思想的エッセイまで、カミュを幅広く読んだ。

さて、私には読まなければならない文学者があつた。それは、トーマス・マンである。なぜトーマス・マンなのかというと、彼は私の愛読してきた日本の作家たちの多くが絶賛しているからである。読もう読もうと考へながら、とうとうこの年齢に達してしまつた。現在の私には、トーマス・マンを読むことが何か義務観念のように頭にこびりついてしまつてゐるのである。

私は最近、つくづく考へる。人生の盛りを過ぎてからの最も贅沢な趣味は読書ではないか、と。確かに、現在の世の中には楽しいこと、面白いことがたくさんある。しかし、読書の愉しさには格別の味わいがあると思ふのである。いつでも自分の気の向いた時に、好きな場所、居ながらにして時空を超えてさまざまな人たちと会える。相手もいらぬ。金もいらぬ。時間ができたら、まずトーマス・マンの『ブデンブローク家の人々』を読破したい。その次は、『カラマーゾフの兄弟』だ。（平成二十年）

『音楽に関する二冊の本』

最近、音楽に関する二冊の本を読んだ。『音楽が聞こえる』（高橋英夫著・筑摩書房）、『すべては音楽から生まれる』（茂木健一郎著・PHP新書）。『音楽が聞こえる』は、著名な詩人たちの音楽体験と彼らの詩の中に流れている音楽について書かれ

ている。

宮沢賢治が無類の音楽好きだったことはよく知られている。賢治はチェロやオルガンの演奏の稽古をしたり、レコードに夢中になったり、童話作品の中に音楽家を登場させたりしている。弟の清六氏によると、「渴していたものが水をむさぼり飲むとでもいう風に」レコードを集めたり、ベーターベンやチャイコフスキーを聴いて、「此の作曲者は実にあきれたことをやるじゃないか」とか、「ベーターベンときたら、ここのところをこんな風にやるもんだ」などと言いながら、蓄音機のラツパの中に頭を突っ込むようにしながら、旋律の流れにつれて首を動かしたり手を振ったり、踊りはねたりしたそうである。賢治が音楽を聴いて驚喜している様子が伝わってきて興味深い。このように音楽を聴くことの蓄積があつて、それが詩への創作へとつながっていったのであろう。そのところを筆者は、次のように説明している。

「バッハやベーターベンは、生来賢治の内部にくるまこまれていたメンタルなものをはげしく揺さぶり、眼には見えない亀裂、もしくは出入口を作った。揺さぶられた内部から、亀裂から滲み出すようにして、メンタルなものはことばとなつて、外に溢れ出てきた。メンタルなものからことばへのパトインタッチが行われたのだ。それが一九二一年のことで、次の年一九二二（大正十一）年が詩集『春と修羅』の最初の年となる。」

筆者の主張の中で、私が最も共鳴したのは、次の件りである。

「詩を書くというのは、言葉を『音楽』として、音楽のように扱うことだ。そう感じられるケースである。たとえばシュルレアリスムふうに言葉が飛躍・散乱し、意味の流れがつかめないようなとき、『この詩は要するに音楽ということなのか』という感じが起こりやすいだろう。」

このことは、茂木健一郎の主張と通じている。

「誰にもつかむことのできない抽象的ななにか、言語での説明を超えたところにこそ、きつと本質はある。音楽の至福とは、音楽そのものの核心、わからない『なにか』に接した時の愉悦であり、感動であり、喜びなのだ。」

この二人の言葉を解釈すると、以下のようなものではないだろうか。難解な現代詩に出会って苦慮したとき、これは音楽だと思えばいい。その詩の中から深い意味を汲み取ろうと努力することは必要だが、結果としては解らなくともよい。その詩を読むことによつて、我々はそこから目に見えない何かを得ているのだ。難解なクラシック音楽を聴いたときも同じである。確とした深い感動が得られなくとも落胆することはない。ただその戦慄に身を任せていればいい。そうすれば、感受性が豊かになるとか、深いところで意識の変革がなされるとか、何らかのプラス作用が働くことになるのである。

最後に、『すべては音楽から生まれる』には、筆者

の音楽への思いがアフォリズムとして至るところに散りばめられている。

「消え去つた音楽はゼロになるわけではなく、残る。」

「気持ちのよい音楽を聴いているとき、私たちは数学的な精密さで構築された自然界の波動を享受しているのだ。」

「端的に言つて、頭がいい人とは、脳の中にいい音楽が流れている人だと思う。」

『『人生のすべてが音楽である』という気づきを持つことが、生きていく上で大事なのだ。』

「音楽の本質は、言葉で表すにはあまりに深い。」

「最近では、他人の文章を読む時も、音楽のように読んでいる自分がある。」

「この世には、音楽にかかわらないものはなにもない。」

すべて名言・至言であると思う。(平成二十一年)

『二月』

正月という華やかな月の後に位置しているからであろうか、二月は目立たない地味な月である。また、「二月は逃げて走る」と諺にもあるとおり、この月はあつという間に過ぎ去ってしまう。

この季節を『早春賦』は「春は名のみ風の寒さや……」と表現している。立春とはいえ、万象に冬の気配が漂い、鶯も鳴くのをためらうほどの厳しい寒さ。それでも、日ごとに日脚は伸び、枯草に新芽が萌えはじめている。

私は庄野潤三の『早春』を読んでこの季節への関心が深まり、特別な思いを抱くようになった。次のような会話がある。「二月になると空が明るくなるね……いま頃の気候がいちばん好きだな」「私たちもそうなんです」三十年近く前に読んだ小説なので細かい内容は忘れてしまったが、何の変哲もない

会話だけが今でも印象的に残っており、二月の夕空を染めて沈む美しい夕日を見るにつけ、この小説の一場面が懐かしく思い出されるのである。

歳時記に「希望」「生命」という季語を入れるとするならば、最もふさわしいのは二月であろう。挫折して生きる希望をなくした人をやさしく包み勇気づけ、再生への決意の灯を点すことのできるのは、二月の日の光をおいて他にはないと確信するからである。

（雲を洩る日のひとすじや卒業す）大野林火

この繊細ではあるが生命力に満ちた、一条の光が象徴する二月という月を、いつくしむように大切にしたいと思うのである。（平成二十二年）

『三浦哲郎氏のこと』

年末の新聞に掲載される著名人の計報記事を読んで、毎年感慨をひとしおにする。昨年もさま

ざまな分野で、惜しむべき才能が失われていった。中でも私が格別の思いを抱いたのは、八月に亡くなった三浦哲郎氏の死である。

私は若い頃、神戸文化ホールで三浦氏の講演を聴いて、非常に感動した覚えがある。ゆつくり、ゆつたりと話すハスキーな声が、温厚そうなその姿とともに蘇ってくる。冒頭で、ユーモアたっぷりに次のような話をし、聴衆の笑いを誘った。「以前、文芸春秋主催の講演会で福岡へ行ったのですが、自分の前に五木寛之さんが講演をした。五木さんの時は立ち見まで出るほどの盛況だったのですが、自分の番になると客がぞろぞろと出て行き、会場はがらがりになりました。今日は私ひとりなので、皆さんは私だけのために足を運んでくださったと考えていいのでしょうかね」。

三浦氏は、一家の不幸な血について具体的に話した。この不幸な血について書くことから、自分の文学は始まったのだ、と。

「私は、六人兄弟の末っ子です。私の六歳の誕生日に、二番目の姉が青函連絡船から津軽海峡に身を投げて死にました。その年の夏、長兄が失踪しました。翌年の秋には、妹の自殺の原因は自分だと思ひ込んで、一番上の姉が服毒自殺しました。十九歳の春、自分を大学に入れてくれたすっかり者の次兄が失踪しました。一番上の姉と私のすぐ上の姉は、先天性色素欠乏症という遺伝性の病気でした。このことが一家の上に重苦しくのしかかっていたのです。」

三浦氏が太宰治の存在を知り、文学に目覚めていくまでの話も印象的だった。三浦氏が十八歳で早稲田大学の政経学部に入學した年に、太宰治が自殺している。「ある日、下宿の食堂で朝食をとっていると、文学青年として通っている学生がおもむろに新聞を広げて、『ダザイ・ジが死んだ』と驚きのつぶやきをもらしたのです。太宰のことなど全く知らなかった私は、ダザイ・ジとは誰のことなのだ

ろう？ 私は、翌日同郷の友人にそのことを訊いてみたのです。『それはダザイ・オサムといって、我々と同じ青森生まれの有名な小説家だよ。』友人は太宰治の本を数冊貸してくれました。『それらの本から太宰に心酔し、文学を志すようになったそうです。』

「大学二年の春、学費の援助をしてくれていた兄が突然行方不明となり、そのショックで休学届けを出し、帰郷しました。そして、本格的に小説を書くことを決意して早稲田大学の仏文科に再入学するまでの二年間、故郷八戸の中学校で臨時の教員として英語と体育を教えました。漁師町にある学校でした。夜の宿直室にひとりいると、海鳴りの音だけが聞こえるのです。風の強い日には、校舎がきしみました。そのような音を聞きながら、ノートに小説の断片のようなものを書き始めたのです。時には、漁師の親御さんが取れたたての烏賊を宿直室まで持ってきてくれるんですよ。それを細切りに

してどんぶりに入れ、醤油をぶっかけて、まるでうどんのようにするずるといつきに食べる。これが実によくうまいですよ。」その懐かしい味を思い出すかのように、満面の笑顔で三浦氏は話した。

意外だったのは、三浦氏が高校生の時までは、文学とは全く無縁のスポーツ少年だったことである。八戸高校ではバスケットボールに熱中し、その素早い動きと俊足から、「はやぶさの哲」と恐れられていたそうである。チームが国体に出場し、準決勝に進出したこともあるほどだったらしい。(三浦氏は若い頃からマイケル・ジョーダンという名の黒人選手に深く心酔していて、どうしても彼の神業としか思えない華麗なプレーぶりをじっくり観たくて、はるばるシカゴまででかけたという内容のエッセイを、二年前の『オール読物』に書いている。)

最後に、三浦氏の小説を二つ紹介します。『忍ぶ川』(新潮文庫・540円)は、ぜひ読んでください。

芥川賞を受賞した短編小説です。映画化されて、ずいぶん話題になりました。皆さんには古めかしい恋愛小説という感じがするでしょうが、純愛を扱った永遠の青春小説といつていい作品です。もう一冊は、『白夜を旅する人々』（新潮文庫・780円）です。人は誰でも、避けることのできない宿命を背負って生まれてきます。その宿命に耐え、闘いながら生きていかねばならない。人生の深淵を描いた、すばらしい自伝的作品です。（平成二十三年）

『百まで生きて、死ぬ』

三十過ぎの頃、同僚の英語教師に一枚の丸いワッペンをもらったことがあります。そのワッペンは、カベリーニというイタリアのベネチア生まれのメイル・アーティストが自己PRのために作製したものだそう、赤と緑を基調としたシンプルな図柄の中央に、“CAVELEINI”とあり、その下に、「1991

4-2014」と記されています。この数字は、一九一四年生まれのカベリーニ氏が、二〇一四年まで生きるつもりであるということの意味しているのだそうです。なかなかおもしろい発想だと感心させられました。「俺は百歳まで生きるぞ」という強い決意がありありと伺えるのです。このワッペンがとても気に入ったので机に貼り付けて大切にしていたのですが、カベリーニ氏は残念ながら八十六歳で亡くなつてしまいました。

現在の高齢化社会においての幸福な死に方は、カベリーニ氏が目指したように、百歳まで生きてから死ぬことだと思ふのです。というのは、長生きをすることによつて、人類の文明的発展の歴史をまざまざと体験、享受できるからです。私が生きてきた六十年で、文明は新しいさまざまなものを作り出してきました。三種の神器といわれた家電のテレビ・洗濯機・冷蔵庫。三Cと名付けられたカラーテレビ・クーラー・カー。その後を訪れたデジタル機器。

携帯電話やパソコン、特にインターネットの及ぼす力には驚くべきものがあります。一個人が世界に向けて情報を発信できることなど、誰が想像しえたでしょうか。宇宙開発もさらに進むでしょう。

江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎も、「六十三歳になつて、鳥や魚や、草木の本当の形と性質がやつと解つた」と言っているように、年を取らないと解らない真実もあるはずです。長く生きていければいるほど、それだけいろいろなものを見ることができるので、それから、芸術面の新たな真理を発見するチャンスもあるというものです。

ですから、私も大いに長生きをしてやろうと考えています。『大鏡』の世継や繁樹のようなわけにはいかないでしょうが、カベリーニ氏が目指した百歳くらいなら生きられるかもしれません。彼の遺志を引き継いで、認知症になるかもしれない、介護の世話を受けることになるかもしれない、そ

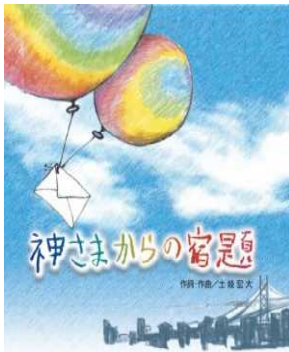
た恐怖と戦いながらも生き抜きたいと思います。子や孫やひ孫が、百歳まで生きて死んでいった私の死を、幸福な死に方だったと評価してくれるかどうか。そのことは、少々気がかりなのですが。（平成二十五年）

※外国の文学や音楽などその該博さには脱帽です。太宰治は私もよく読みました。

1947-2047

―石川希理





F O P

しんこうせいこつかせいせんい いけいせいしよ
進行性骨化性線維異形成症 (Fibrodysplasia Ossificans Progressiva : FOP)とは結合組織に発生する稀な遺伝子疾患。発症率は200万人に1人。筋肉などが骨に変わります。

◆明石でも市立明石商業高校1年生の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し、ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

◎「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。
ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせは『いっくんを応援する会 - FOP明石 - 』

事務局 office@fop-akashi.jp (メール)

◆<http://fop-akashi.jp/office/> (HP)

◆絵本やCDの販売も行われています。(点字版もあります。)
絵本は1冊500円(送料別 - 3冊まで送料: 飛脚メール便で80円)

メール ehon@fop-akashi.jp

D-FAX 020-4622-7570

◎申込方法: メールまたはFAXにて、お名前、郵便番号、住所、電子メール、電話番号、注文部数を明記の上、お申し込みください。

◎学校での教材セットもあります。お問い合わせ下さい。

「祖父と大八車」

胃弱亭 骨人

十二月に入り、ようやく私の紅葉行脚も終わり、久し振りに名古屋に住む息子夫婦に会って、初冬の伊勢路を二人の孫と遊んだ。ぎこちなく祖父を演じる私の姿は果たして幼い孫の目にどのように映っていたであろうか……。

思えば、もの心ついた私の記憶に残る祖父もちょうど今の私と同じ位の年であつたはず。以来、高校三年生の夏に亡くなるまで、父を知らない私の人間形成に、この祖父の存在が如何なる影響を与えたのであろうかと、今改めて思う。

祖父は明治18年、四国讃岐に生まれ、大阪に出で一旗上げようと海を渡つたものの、船の着いた神戸に留まつて商いを始めたらしい。当時は東京の浅草に匹敵する賑いを呈した「新開地」の近く。歴史

上に清盛の福原遷都で知られる兵庫区荒田町で食料品店を構え、結構羽振りも良かったそうである。祖母がまだ健在だった頃、「おじいさんは若い頃な、福原に遊びに行く時は、いつも金の靴こはせをした足袋を履いて行きはつたんやで。」と、意味もよくわからぬまま聞かされた記憶がある。今も、市民から「楠公なんこうさん」と呼ばれる湊川神社の正門脇の大きな石灯籠に「柴田芳太郎」と残る刻名からも当時の羽振りのよさが偲ばれよう。しかし、私の父は朝の早い商売を嫌つて会社勤めをして祖父の店を継がず、その店は昭和19年の神戸空襲で焼失し、その父も昭和22年、疎開先であつた須磨で私が生まれたのと同時に三十才の若さで夭折した。

戦後の祖父は店を再建することもなく、中央市場近くの親類の店の一角を借り倉庫代わりにして、仕入れた食料品をいっぱい積み上げた大きな大八車を引きながら戦前からの得意先を頼りに

行商を続けていた。今で言う移動スーパーの走りである。七十才近い老人が重い大八車を引きながら一家の大黒柱として働く姿は、幼い私の目にも頼もしく映っていた。昔からの馴染み客も多く、結構稼ぎもあつたようで、商売柄いつも前掛けの下の腹巻に札束がいっぱい詰まっているのを見ては、「おじいちゃんは今持ちなんや」と、子供心に思っていた。今でも母子家庭の私が私立の大学まで進めたのもこの祖父の蓄えがあつたからではないかと思つている。

明治生まれの祖父は、男の威厳を色濃く残し、今の私のように、「ジイジ」と呼ばれ甘えられるような存在では決してなかつた。幼い私にとつては有無を言わせぬ絶対的な存在であり、頑固を絵に描いたような人であつた。食事の時はいつも上座に座わり、たまに晩酌の酒が切れていたりすると、食事の中にもかかわらず近所の酒屋まで走らされたこともよくあつた。客に対しても頑固で、店の品にケチ

をつけようものなら、怒つて追い返すような人である。行商とは言え、扱う商品への自信とプライドがあつたのであろう。自分が食べ物を商つていただけに「食」に関しては特にうるさく、こだわりを持った人で、仕事か休みの日にはよく私を連れて「新聞地」や「天王寺」へ行き、色々とうまい物を食べさせてもらったように思うが、何せ幼少の頃故、まだ味の本質もわからず正確な記憶はない。



ただ子供心に忘れられない思い出が一つある。休みの日に例によって天王寺へ連れて行ってもらう、昼食にある寿司屋へ入った時のことである。出された巻き寿司を一口食べたときに、いきなり祖父は、「秀夫もう食べるな。この店は悪い海苔を使^つてる、でるぞ」と言つてさつさと店を出てしまうのである。私はお腹も空いていたし食べたてしかたなかつたが、祖父には逆らえず、後についてとぼとぼと店を後にしたことを今でもはつきりと覚えていいる。どうやら食い物の恨みは一生残るものであるらしい。

とにかく祖父は自分が「うまい」と決めたものしか口にしないという頑固さがあつた。好きなお菓子も『○○屋』の○○と決まっているので、必ずその店まで買いに行かされた。ある時、いつものように「○○屋で○○を買つて来い。」と言いつけられたが、知恵のつき始めた私はついめんどうくささから、同じ種類のものであれば店が違つても味が変わり

はないだろうと思ひ、近くの店で買つて帰ると、祖父は一口食べるなり、「これは○○屋のものでは無い、買い直して来い！」と、こつびどくしかられて、再度買いに行かされた事を思ひ出す。とにかく食い物へのこだわりの強い人であつた。

私にとつては父親代わりとも言える祖父であるが、とても甘えるということなどできようはずもなく、その分、母にわがままいづばいしながら、祖父の前では常に従順な子であらねばならなかつた。そんな中でも、小学校の低学年の頃であつたと思う。友達が皆乗つていた自転車が自分もほしくなり、母によくせがんだものの、祖父にはそのことを言ひ出せずにいたのであるが、ある日学校から帰ると、ピカピカの自転車が一台置いてある、それも庭や玄関先ではなく、部屋の中にである。驚いた私は母に尋ねると、何と祖父が買つてくれたとのこと。帰つて来た祖父に礼を言う前に一言、「秀夫、これがほしかつたんやろ。」。本当にうれしかつた。子供心に

八車を引く祖父を助けて、車を後から細い身体を折り曲げるようにして力いっぱい押しながら、活気あふれる神戸の下町を一日に六キロm近く巡り歩くのである。私にとつてこの手伝いはレクリエーションのようなもので、今流行のウォーキングの先駆けであろうか。おやつ時や昼食時に近くの店で何かおいしいものを食べさせてもらうのが目的でもあった。炎天下にその頃ようやく町で普及し始めたクーラーのよく効いた店に入り、食べた冷しうどんや氷あずきの味は正に感動ものであった。この祖父の手伝いは、周囲を気にして恥しさを覚え始めた中学二年生の頃まで続いた。今でもランニングを欠かさぬ私の肉体はこの頃に培われたものかも知れない。

あの重い大八車を七十の半ばになるまで引き続けた祖父はとにかく力の強い人であったが、同時にとつともなく体の細い人でもあった。よく近所の大師湯という銭湯（尾崎放哉も須磨寺滞在中よく

通つたらしい）に一緒に行つたが、日焼けしたガリガリの体に筋肉だけがまとわり付いたまるで理科室にある人体標本のような体をしていたという印象が強い。その頃はまだ肥満体型が今ほど氾濫しておらず結構痩せた人も多かつたが、その中でも祖父の体は際立つて細く、必要な筋肉だけが目立っていた。その細い体でどうしてあんなに重いミカン箱を担いだり、重い荷車を引くことができるか不思議でならなかつた。私が高校一年の頃、家に遊びに来た友人に、すでに八十才近かつた祖父が「秀夫の友達かいな、よろしくな」と言つて肩に手をかけた時の力強さは尋常のものではなかつたと、後にその友人が私に語つた事を思い出す。若い頃からの力仕事で祖父の肉体を鍛え上げていたのである。

ともあれ、かような祖父の肉体は、その後の私の瘦身コンプレックス払拭の起爆剤の一つに成り得た事は否めない。

そんな祖父に私は一度だけ反抗した事がある。高校三年になつた私が受験勉強の最中に、例によつて「おい秀夫、〇〇屋の菓子を買つて来てくれ」と言うのである。私は受験期のいらだちもあつて思わず「忙しいんや、後にくれ！」と叫んだ。今振り返つても、これが私の記憶に残る祖父への唯一の口答えであつたと思う。

仕事を辞めてから、晩年の祖父の楽しみはテレビを観ることであつた。NHKの大河ドラマに執着し、特に「赤穂浪士」（長谷川一夫主演）には熱を上げていた。そしてあの東京オリンピックでは日本選手の活躍に胸躍らせて……。戦後日本の発展を見届けるように、昭和40年八十一才で旅立つた。私の知る限りでは歯医者以外ほとんど医者にかつたことのない人であつたが、咳をすると痰に血がまじると言つて医者にかかつたが、老人性結核でそう長くはないと診断された。しばらく寝込んだ祖父は死ぬ日の朝、好物であつた「〇〇屋の寿司

が食いたい」と言い、その寿司をうまそうに食べ、その夕方静かに息を引き取つた。今までいろんな人の死に接してきたが息を引き取る瞬間を見届けたのは祖父だけである。これを大往生と言わずに何と言おうか。

今、六十六才の私。祖父と顔は全く似ていないが、体つきはあの時銭湯で見た祖父とよく似ている。そして、ものへのこだわり方もどこか似ている。今も私の臉に残る重い大八車を引く祖父の姿と、今も細い体で走り続ける自分の姿がだぶってくる。この年になつても元気に走り続けられるというすばらしい財産を残してくれた祖父に改めて感謝したい。願わくば私も最期は病院の白いベッドで医療器具に囲まれて死ぬよりは祖父のような大往生を遂げたいものどつくづく思うこの頃である。

戦後の高度成長期、市電の軌道に溢れるオート三輪、その中を悠然と大八車を引く老人。ああ昭和は遠くなりにはけり。

※胃弱亭氏と私は同年齢です。オマケに同じ神戸市育ちの人間です。さらに同じ仕事で同じ職場で今も友達です。読みながら、「そうか、そうか」と納得していました。一つは大八車を引いた細くて筋肉質な人を思い浮かべたからです。一つは銭湯へ行くようなそんな時代を思い出したからです。

いい人生の宝物のような祖父が染みこんできました。

そして、頬が緩みました。「なるほど」と、胃弱亭氏の日頃のパターンを思い出したからです。

それは彼が許せばお酒の席でもお話ししましょう。
―石川希理



翼をなくした、ベガサス

高阪博一

最近、この沿線は小説になった。別に読んではいないので、どんな内容なのか知らない。この駅は小説に出てきたのだろうか。土・日以外は単なる住宅地、土・日だけ、人と車が溢れかえる。阪急・今津線・仁川駅。久しぶりに小畑さんは、大勢の人に押されながら、この駅の改札を出た。目の前に地下へ通じる階段がある。この地下の通路が阪神競馬場に通じているらしい。昔、こんな地下通路はなかった。改札を出ると、醤油の焦げる香ばしい臭いがしたものだ。今日、その臭いはない。確実に新しく、美しくはなっている。懐かしさをどこかに置き忘れてきたかのように。

昨夜は余り寝られなかった。同じ事の繰り返しである日頃は、ワクワクとする期待感もジクジクと

する喪失感もない。確実に遣つて来る時間を受け入れて、その時間を潰していくだけだ。だが、明日は違う。何かが起こるかもしれないと思うと小畑さんは眠れなくなつてしまった。(会社を辞めて、もう三年になるよな。競馬場に行くのはホンマ久しぶりやなあ。時々、場外馬券は買いに行っているけど。まあ、年金生活者はそれ程行けんし……。当るかなあ。当てたいなあ。きつと当たる)賭けというのは気持ちを昂ぶらせるものだ。勝つた時、負けた時、それぞれの想像が絢交ぜになつて、頭を占領し掻き立てた。(勝負弱いねんなあ、昔から)寝返りを打ちながら、そんな独り言を頭の中でブツブツ呟っていた。

競馬場の入口まで歩きながら、周りを見回した。確実に若い人が増えている。男女のカップルあり、職場仲間のグループ風もあり、賭け事をしに行くというより、ピクニックにでも行くように明るい

笑顔で話をしている。大学生風の人も多い。確か、大学生は馬券を買えない筈だ。買わずに見ているだけなのだろうか。オリンピックではあるまいし、馬券を握りしめて見るから、競馬は面白いのだ。つい、余計な事を考えてしまう。小畑さんも始め出したのはその頃だと言うのに。(七十年安保か。あの頃に麻雀と競馬、覚えたなあ。大学へ行くのは嫌やった。団交か集会か：、それにゲバ棒。これは死語やなあ。何か無性に寒かったなあ、財布も心も)色褪せたカラーフィルムのように、僅かな色を保つただけの思い出が、乾涸びた頭の中を通り過ぎて行った。

小畑さんはポケットから二百円を取出した。目の前の自動販売機にそれを入れた。入場券が出てくる。それを差し出して、競馬場の中に入った。(そうや、予想紙を握って、ただ前を向いて、普通に歩いている人が場内に入る。途端に、顔が血走り、今にも走り出しそうな感じで、せわしく歩き出す。そし

て、馬場に向かつて小走りになってしまった。この感じは変わらんわ、僕ら世代前後は大体このタイプが多いなあ。どこか余裕がないんやわ)次から次へと場内に吸込まれていく人を見ながら、居心地の良い場所を見つけたような気持ちを抱いていた。家の周りでは減多に見られない昂ぶった顔の初老の男性達、帰りは落胆の皺を見せるとしても。そんな人達に囲まれている安心感というのだろうか。腕時計に目をやった。もう、十二時を三十分も過ぎている。(昼ご飯、食べな、ええ考え浮かべへんよ)食べる場所を探して、キョロキョロと辺りを見回していた。

昔から、小畑さんは競馬場に行くと、ゴール前に陣取る事になっていた。今日もそうだ。食事を済まして、その場所に向かった。そこは勝負が決定する一瞬が見える場所だからだ。ゴールこそ馬も人も最も真剣になつていっている所なのだ。既に、そこは人でいっぱいになっていた。大きな望遠レンズを構えた人や、ビデオを持った人達で占領されている。行くの

が遅過ぎた。(食事、抜きやったかも。思う事は、皆一緒やなあ。それにしても、若い女の子多いよ。ここでデートしようなんていう発想はなかつたなあ。男は、黙って一人で勝負！やったもんなあ)落胆の思いと軽い苦笑いが浮かんできた。

仕方がないので、別の場所へ移動しようとして後ろを振り向いた。全面ガラスで出来た巨大なスタンドが襲うように眼前へ迫ってきた。(テレビでは見ていたけど、こんなに大きいとはね。昔は吹き曝しやつたのに。甲山から吹き下ろす風が冷たかつたなあ。それにしても、よう入っているよ。師走も八日の日曜日。そろそろボーナスも出ているしなあ。久しぶりに、ボーナス欲しいなあ)話し相手もない寒空の中で、小畑さんは予想紙をぐつと握りしめた。

もう直ぐレースが始まると場内に大きな音で放送があつた。ファンファーレが鳴る。小畑さんはゴールから二三十メートル離れた場所に移動していた。(やつぱり、双眼鏡いるよなあ。久しぶりやで忘

れてしもたけど…)小畑さんは周りを見回した。双眼鏡を使っている人はそれ程多くない。大小のデジカメを構えている人やスマホを持っている人が、やたら目に入った。

以前から、競馬場に来て最初のレースは馬券を買わない。その日の勝負の傾向を見る為に、ただ見ているだけだ。一分から二分の勝負だ。周りの人が大きな声を出している。行け・差せ・逃げ切れ。昔から変わらない言葉を叫んでいる。その声も、直ぐに溜息に変わる。「やつぱり、あの三番、強いわ」「なんで、買わんかつたんかなあ」「本命馬券や、こら、取れんわ」何度も繰返された台詞が大きな鼻音にかき消されていく。シルバーマータリククの不気味な機体が車輪を格納して、何万という溜息を吸込みながら、ただ青いだけの空を横切り、飛び去つていった。

小畑さんは次のレースの為に、パドックへ向かつた。そこはレースに出走する馬達が状態を見せる場所

だ。一周百メートル程度のトラック状の場所を馬が何度か周回する。この場所は播鉢状で、観客が周りから見下ろし、馬が底を歩くという形状になっている。観客はそこで勝ち馬の見当を付ける。見たところで、勝ち馬を見つけることは先ず出来ない。それでも行く。儀式のようなものだ。これをしないと安心出来ない。落ち着かない。負けた時に、あんなに良く見えたのにと自分への言訳も出来ない。(勝つ馬の分かる方法はないよね。分かれば、皆、大金持ちや。いや、そうなると、競馬はしないよね。負ける人がないもの。負ける人がないという事は、勝負事やないものね)変な理屈を頭の中で思いながら、黙々と周回する馬達の姿を小畑さんは眺めていた。

予想紙を見ていると五番の馬が本命のようだ。栗毛が昼下がりの淡い光に映えている。スポットライトを浴びたスターのように、緩やかに、堂々と歩いている。もつと近くで見ようとして、階段状になっ

ている観客席を下の方に降りて行つた。二段降りたところで、下にいる人の肩に触れて、その人の持つ予想紙を落としてしまった。

「すみません」

小畑さんは小声で言いながら、頭を下げた。

「走る前に落馬かいな。縁起悪いなあ。いやー、これで厄落しになるかもね」

黒い縁取りの丸い眼鏡を掛け、ブラウンのダツフルコートに濃い黄色のマフラーを首に巻いた人が、小畑さんの方を見て笑っている。何となく、人の良さそうな笑顔だ。何処かで出会った事があるという思いが、ふと小畑さんの頭を掠めた。

「夢中になるよね。ええ馬、いました?」

白いものの混じる髪を掻揚げながら、柔らかな声でまた言うのだった。(あの額の皺の具合や髪の毛の量からすると、七十前後。五つは上やなあ)相手を見ながらそんな事も思っていた。

「五番の馬、良いと思いませんか?」

小畑さんは、ついこんな言葉を口に出してしまっていた。自分から話かけたり、話を広げたりする事はそれ程好きではなかった。会社に勤めていた頃は人事や労務畑が多かったので、話好きの小畑と呼ばれていた。会社は糧を稼ぎ出す所だ。無言では仕事にならない。隠すとまではいわないが、装っていたのは事実であつた。(辞めた途端に、話をしないようになつたなあ。周りに友達もいなかったし、作るうとも思わなかった。それでも苦労はしないと、作つてた。家でジーンとしてたとしてもね。テレビとお友達ではアカンわなあ。見ているだけやもんね。時間、長いよなあ。やつぱり、外と繋がつて、ナンボやなあ)小畑さんは、妙に懐かしい感じがする相手の顔を見ながら、そんな思いを抱いていた。

「五番、前回一着や。ええやん、ええやん。からだに張りがあつて、色・艶も申し分なしや。ピカピカや。ええつと、オツズはと…。ああ、二倍やね。今の低金利考えたら結構な倍率やでえ。まあ、大本命や」

相手の声が活気に満ちている。先程の予想紙を見ながら、また、喋り出した。

「馬体重は今日が四六五キロやから、前回と増減なしや。あ、こつち、向いたがな。目が合った。くりつと可愛い目がゆうてる、ゆうてる、『おれ、走るよ』つて。聞こえんかなあ？」

「楽しそうな明るい声が、辺りのざわめきを通して、小畑さんの耳に届いてきた。

「やつぱりですよね。これしかありませんよ。二倍でも、当たれば、倍返し。倍率の高い馬でも外れたら、パーですもんね」

小畑さんは何となく馴れ馴れし過ぎるような気がした。初めて会つた人だ。この数年、こんな事をした事がない。(目的が一緒の人とは率直に話が出る。ここに居る人の目的は百人が百人とも決まつている。つまり、すべて同士という訳や、馬券師同士なんや。そしたら、自分から話していけば、情報や知識をきつと分けて貰える。シャイな気持を

捨てれば、ええんや。ポジティブですよ！話かければ、ええだけの事ですよ。そう言えば、競馬も一人で行く事が多かったなあ。競馬場で人と話する気もなかったし、その余裕もなかったなあ。何か吹つ切れたような顔になつて、また言葉が続けた。

「一着は五番としても、二着はどう思いはります？」

小畑さんはストレートに質問した。白髪の方は周回する馬をじつと見ていた。風が熱くなつてきた頭を冷やすように、さつと吹き過ぎて行く。

「十番の芦毛アシはどうやろ。白い毛に黒い斑点がくつきり浮かんでる。あの濃い青色の馬具が肌の色に溶け合つて、もの凄く綺麗や。それに、余り人気がないのもええけどね」

その人は小畑さんの方を見て、にたりと笑いながら答えた。確かに綺麗だと思つた。競走馬は商品だ。入念に磨き上げているのだろう。だから、綺麗なものだ。だが、生き物だ。いくら手入れをしても、

体調は表面に現れてくる。調子の良くないものは、仮に綺麗であつても、ひ弱な感じがあるものだ。この芦毛の馬にはそんな感じは微塵もなかった。

「決めました。十番ですわね」

「即決やね」

「そろそうです。決めたらぶれませんよ。どこかの国の政治家みたいには…ね」

そう返事をして、小畑さんは自分の言葉遣いが比較的丁寧だと思つた。多分、年上だろうし、それに、初対面の見知らぬ人だ。余り雑な言葉使いはしたくなかつた。たとえ、競馬場で出会つた人であっても、以前、会つたような気がする人であつても。

「そしたら、馬券、買つてきます」

「グット・ラックやね」

「ところで、どうすんですか？ええつと…。お名前は何？」

「名前か、小山や。又の名を『さすらいの馬券師・ヒロチャン』や」

「馬券師の割に、ヒロチャンつて、可愛い名前ですね」
「そうやる。冷たさの中に暖かな血が流れているよ
うな、このギャップがええんやなあ。たまらんなあ。
モーニング着て、場末の映画館に行くような、ダン
ディズムやね」

それを聞いて、小畑さんの頬が緩んだ。何処まで
が冗談で、何処までが本当なのか、分かりはしな
い。それでも、話していて楽しいのだ。ここにいる何方
という人の中で、二人は話すべく選ばれたのだと小
畑さんは思った。辺りのざわめきが消えて、まるで
ヒロチャンと二人だけになったような気がした。

「どこで、見てます?」

「適当な場所です。勝負師は一人で見るとは
孤独なもんですよ」

ヒロチャンが吹き出しそうな顔を、こちらに向け
ている。

「勝負師は孤独なんです。まあ、それはそれとし
て。このレース終わったら、またこの場所で。必ず、

ねー」

小畑さんはこれで別れなくなかった。ほんの束の
間でも冗談が言えたのだ。三宮の雑踏の中ではこ
うはいかない。ただ、黙って通り過ぎて行くだけだろ
う。競馬場という特別な場所だから、こんな話が
出来たのだろうか。(群衆の中の孤独つてフリーズ
が有ったなあ。そんな格好のええもんやないけど。
縁なんかなあ、ここで出会うという)そんな事を思
いながら、発券機の場所へ小走りに歩き出して
いた。会えるという妙な確信があつたので、ヒロチャン
の方を振り向く事はなかった。

ゴールから少し離れているが、ターフビジョンと
いう大きなテレビを正面から眺められる場所に小
畑さんは立った。このテレビは五十メートルの水泳
プールを横に立てたような大きな形状の物であつ
た。競馬場のような広い場所で、向こうの小さくな
つた物を見るのには便利なものだ。(こんなん、以前
はなかつたよなあ。よう見えるわ。これなら、ゴール

前に行かいてもええわ。それに、双眼鏡もいらんがな」と感心したように小畑さんは頭の中で呟いた。先程買った馬券を手で握りしめながら。

スタートした。短距離の千二百メートル戦だ。一分ちよつとで決着がつく。例の五番は直ぐに先頭に立った。ターフビジョンにコーナーへ殺到する馬達の姿が映し出されている。目が吊り上がり、今にも嘔みつかんばかりの形相だ。柔らかなゴム毬のような筋肉が躍動する。鬣タテガミが冷たい風を鋭く切つて、激しく靡いている。大きく開いた鼻腔から呼吸する息の音が聞こえてきたような気がした。

五番は快調に走り、他に先頭を譲る事はない。最終コーナーを回つた。芦毛の十番は後ろの方をゆつくり走っている。(もう一寸、気合を入れてえな！走ろう、なあ、なあ)心の中で思いながら、小畑さんは「十番、行け」と声を張り上げていた。無駄な努力だった。芦毛の馬は余裕綽々？とシンガリ殿シを走つて、ゴールした。(しゃない、しゃない。ようあ

る、ようある。走る思ても、走らんやつ。走らん思ても、走るやつ。まあ、人間と一緒や。芦毛君、次は頑張らんやで)小畑さんは笑いを嘔み殺して、皺の入つた馬券を傍に有つた籠に捨てた。思いもしない、独り言に何か不思議な感じを受けながら。

パドックに戻つて、ヒロチャンの姿を探した。先程の場所には姿がない。(やつぱり、あれだけの縁やつたんや)と小畑さんが言葉を飲み込んだ時、後ろから軽く肩を突かれた。振り向いた。ヒロチャンだった。嬉しかった。もう、会えないと思つた人にもう一度会えたのだ。

「どうやつた？アカンわなあ。十番はさつぱりやつたもんね。よくある事やけどね。思う通りにいけへんから、またやろうという気になるんやけどね」

「まあ、そうですね」

「次は、どするん？」

「買いますよ。もう一度、十番」

「番号が走ると違うで。馬が走るんやで。馬、見

な！」

「ええんです。見んでも。運を試してみます。『宝くじ』と同じです」

小畑さんはそう言つてパドックを離れた、もこれで、ヒロチャンとは会えないと思ひながら。結果は目に見えていた。今度も、十番は後ろの方を悠々と走つていた。

それから、同じようなレースが続き、もう午後4時前になつていた。あれ以来ヒロチャンと出会つていない。パドックに行つても、ゴール付近に行つても、姿はない。最終レースの馬券を買つて、あの大きなテレビが正面で見られる場所に小畑さんは立つた。

背後の大きなスタンドが冬の長い陽を遮つている。薄暗い影が全身を包んでいる。群衆のざわめきとその影にすつぱり覆われたように、沈黙が辺りを支配している。(氣持、悪いほど、静かやなあ。何、この雰囲気は?)小畑さんは、ぶるつと身震いをしながら、目の前の暗闇を凝視した。沈黙のカーテンが

音もなく開いて、あのヒロチャンがゆつくり歩み出て来た。

「馬券はどうですか?ところで、僕は誰だと思ひます?」

「さすらいの馬券師、ヒロチャンでしょ」

「もう、茶化さないで!僕の事、懐かしと思わなかつた?何処かで会つたような気がしなかつた?どうかなあ」

「話易かつたし、初対面な感じはしなかつたけど:」

「そうですね。僕はもう一人のあなただもの」

「ええ、何ですつて」

小畑さんは素つ頓狂な声を出して、ヒロチャンを見つめた。ヒロチャンはじつとこちらを見つめている。「そしたら、あなたはわたしで、わたしはあなたつて事?」

小畑さんは変な雲行きになつてきたと思ひながら、言い返した。

「そう。あなたとわたしは表と裏の関係」

「何か、ポーの小説にあつたような……」

「そんなええもんやないよ。単に、表と裏の関係。誰でもが持っている普通の関係」

ヒロチャンはめつそうもないという顔を見せながら、静かに言うのだった。

「そしたら、裏のわたし、つまり、ヒロチャンやけど、いつたい、何で、出てきたの？」

「ペガサスに乗つて。うー、それは冗談。あんたを元気づけるためにね。家でポーとばかりしてるから。ちよつとは、外に出るようにと忠告するためにね」
「そんな事やったら、家に出てきたら、ええのと違う？」

「そういう理屈も成り立つけど……」ヒロチャンは言いくそうにしながら、また、言葉を繋いで、「わたしも、偶に競馬、見たかつたから」と悪戯つぽく言うのだった。先程の小父さんの感じは消えて、少年のような初々しさがその顔に漂つてきた。

小畑さんはまじまじとヒロチャンを見た。ヒロチャンも小畑さんを見つめていた。双方が黙つて見つめ合っている。時間が静かに過ぎていく。

「有難う、出て来てくれて。この頃、何をしたら良いのか分からなくなっていた。勤めている時は、辞めたら、あれもしよう、これもしようと思つてた。いざ、辞めてみると、時間があり過ぎて、どうしようもなくなつてしまつたよ。大きな時間に押し潰されてるのが、この頃の状態」

「それで、競馬、なんや。それは冗談、楽しみもなければ、ねえ」

ヒロチャンはそう答えて、ふつと息をつぎ、また喋り出した。

「具体的に、できる事を口に出してみる。さあ」

「書く事かなあ。聴く事も出来るなあ。それに、昔、好きやつたダンスも。もう一度、大学に行つて、友人を作る事。それと、大学でやつていた日本の古典をもつと、勉強する事も」

「そんなに、沢山あるのに、今まで。どうして出来なかつたの。まあ、いい」

ヒロチャンは手で顎を撫ぜながら、暫く考えていた。小畑さんはヒロチャンの次の言葉をじつと待った。

「どれが、手つ取り早く、明日から出来そうかなあ。書く事や聴く事は『何を』と考えなあかん。考えてると、また、以前のグズグズや。大学、言うても、入学時期があるしなあ。そや、ダンスや。昔、やつてたら、出来る。地域の公民館にサークルあるから、すぐそれに入って、活動開始や」

ヒロチャンがそれを言い終わつた瞬間、大きな歓声が聞こえて来た。アナウンスがゴール前に殺到する馬達の事を告げている。

小畑さんは握っていた馬券をもう一度確認した。それは一着だけを当てる馬券だつた。先頭を行

く黒い大きな馬のゼッケンと同じ十番が印字されていた。

「あの馬、羽根が生えてる。すごいスピードや。それに、引き換え、俺はどうや。小さいけど、確か持つた筈や。何処かに置き忘れてきたんや、あんな羽根を」

小畑さんがそう呟いた時、「分かつたなあ。ダンスやで。明日からやで。外に出るんやで」優しい声が、大きな歓声の中から聞こえたような気がした。

了

※懐かしく競馬場を思い出しました。もう一人の自分と出会いますが、私も遇つてみたいですね。文章中に素敵な表現が散見されて勉強になりました。 | 石川希理



美しい日々を願う

明花

「君はカレンダーなんか、買わないんだろうな」。

カレンダーが並ぶ季節になると頭の中にこんな言葉がリフレインする。

彼は、同じ職場の三年先輩で何度か食事をしたのだが、東京出身の男性と生まれも育ちも関西の私とでは、感性が違っていたのだろう。いろんな場面で心がざらつ、とした感覚が重なっていった。

小さなトゲを含むその言葉に、肯定も反論も出来ず、結局、転勤で離れたまま連絡を取ることもなく自然消滅の関係となった。

カレンダーを選びながら、頭の中で会話が始まる。

そうね。その当時の私にはカレンダーを買う習慣はなかったわ。

企業は好景気で十二枚仕立てのカレンダーをいっぱい配っていたし、私のお気に入りの酒造メーカーのカレンダーは、写真が素晴らしく美しく、お酒屋さん頼んでないと、手に入らなかった。カレンダーは貰うものだったはず。

「そんな言い訳は要らない」

ふふん、と鼻にシワを寄せて彼が笑いそうだ。

分かつてるって。カレンダーは一年間、使うものだから、好みにあったものを選んで手元におくような、生活に潤いを持った女性であつてほしかったのね。

あなたの影響を受けたわけではないけれど、今は、私が大切に思っている人には、カレンダーを贈ることにしている。新しい日々が清々しく美しい日々であつてほしいと願いを込めて。そして来年も少しは、私と一緒に時間を過ごして欲しいというメッセージも込めて。

その人の好みに合わせたり、逆に選びそうにないものをわざと選んでみたり。イメージ

に合わせて選ぶ時間は楽しいものだ。重なってもらっても邪魔にはならず、一年経てば捨てることを迷わずにすむという最適なプレゼントだ。

それにわざわざ自分のためにカレンダーを買うという人はそう多くないと思うのだ。「結局、それが言いたいなの？」

ううん。違う。

カレンダーを買う女に成長したってこと。自分用のもちやんと準備をする。

あなたにも素敵なかレンダーを選んであげられたら良かったのかもしれないね。

『初暦 知らぬ月日の 美しく』(吉屋信子作)

私の知らないあなたの月日が、美しくあるように。

※カレンダーのプレゼントなんて、凄い！ 私のカレンダーは「どんなものかな

あ」と思いました。最後の句と文が生きていますね。 — 石川希理

詩 三編

大西隆史

世界五分钟前仮説

去年と今年

昨日と今日

眠る時と起きた時

5分前と今

「ワタシ」は「ワタシ」なのだろうか

ふと不安になった

世界五分钟前仮説などと言う

哲学者たちの戯言を否定できない
そんな脆弱な世界の上で
安穩としていることに気付いた時
ふと不安になった

一体この世の中に

「確固たるもの」はいくつあるのだろうか

生きている今があつたとして

生きてきた過去は？

生きていく未来は？

肩を抱く

ふと不安になった

脆弱なこの世界が崩れることを恐れた
杞の国の人を
ワタシはもう
笑い飛ばすことができなかつた

大人になつた

大学を卒業した
お酒も飲めるようになった
吸わないが、煙草も吸えるようになった
洗濯も出来るようになった

ご飯も作れるようになった

一人で遠くまで出かけられるようになった

僕は大人になった

小学生が言う

早く中学生になりたい

中学生が言う

早く高校生になりたい

高校生が言う

早く大学生になりたい

子どもがいつ終わったのか

もう思い出せない

大人がいつ始まったのかも

漠然としてわからない

子どもと言われていた頃の自分が夢見た大人

もう思い出せない

あの頃の自分が思い描いていた大人ってやつに

僕はなっただらうか



透明なのです

透明なのです

ですから

一点の曇りも無い絵画に袖を通し

一音のずれも無い音楽を浴びながら

詩を食べていききたいのです

※詩を食べて生きたいなんて、あぁなんていう生涯。

瞬間の中の永遠という刹那を明るく生き続けた

いと私は思います。 — 石川希理



蒼天は大島へ飛翔する

石川希理

台風二十七号は近畿の南海上を抜けた。

これを書いている、二〇一三年十月二十六日(土)の昼現在は伊豆半島の南にある。

この東に小笠原諸島の大島がある。ずっと南には「鳥も通わぬ八丈」といわれた八丈島がある。

さて、大島である。地図を見てもらえば判るが、東京から大島までは百二十キ。高速ジェット船で一時間四十五分である。

私の意識の中では低い、名

前と大体の位置はすぐ出てくる。それは昭和六十一年(一九八六年)に大島の三原山が噴火したからだ。火山流が街に迫り、当時約一万人の島民が全島避難した。暗いコチニールレッドに黄金のような火花を含みながら、ランプブラックの煙と灰白色の霞を漂わせ、のたりのたりと総てを飲み込みつつ流れ来る溶岩の映像が脳裏から離れない。

避難はたしか十年くらい続いたと覚えている。

この時に「東京都」にこの小

笠原諸島が属していると知って驚いた。多分それまでもなるとなくは頭の隅にあつたと思うのだが、改めて「ああ、この島々は東京都大島町、なんて言うんだ」と思いながらテレビを見ている。

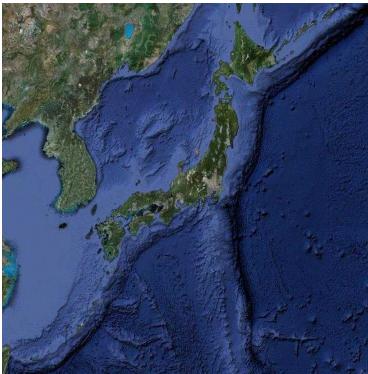
この島では先日の大雨の土砂崩れで死者行方不明が五十人程も出ている。山津波と表現し



て良い程の凄さだった。この大島に雨がまた降りそうである。自衛隊・消防庁・警視庁などが必死になっているが、雨が降ると二次災害もある。

大島に人が住みはじめたとされる約八千年前から、噴火、台風、地震と、災害の多いところだ。

次の二図は「neverまとめ」というHPから取って、手を加えたのだが、二図を合わせるとよく分かる。なんと地球表面を覆う大きな大地の板、プレートが四枚も押し寄せてきている上にあるのが我が祖国である。その



本土の東京都から南に延びる列島線が伊豆小笠原諸島。これは火山や地震の巣である。巨大な大陸がぶつかり、複雑に沈み込んでいるので、その摩擦や歪みが引き起こす動きである。

それでも祖先がそこに住みつき、代々暮らしてきたところだから、生活が可能であればなかなか離れられない。

現在は飛行機が一日二便、三十分で東京まで飛んでいるし、伊豆各島へのヘリコプターや小型機の定期便も実現している。もちろんインターネットも使えるし、飛躍的に便利になったのであろう。

突然、大島のことを書き出したのは、土曜日の今朝、七時過ぎに使っていた電動式のソファを二つ、粗大ゴミに出したからだ。

大きなものは妻と運んで、小さな方は六階の階段を五階まで降ろした後、簡易台車に乗せたまま私一人で出しに行つた。

私の住むマンションはスキップフロアー方式といい、廊下は五階と八階にしかない。エレベーターも五階と八階にしか停まらない。もちろんその代わり二軒の玄関前から下まで一本ずつ階段がある。エレベーターのない公園・県住などで階段がいくつもあるスタイルが基礎になっている。

エレベーターが停まる階は部屋の前に廊下があつて人が行き来して他人の目があるが、それ以外の階は独立性が強くなる。

で、五階の廊下を進んでエレベーターにのせて、一階に降りると東のゴミ置き場に進んだ。周りは駐車場と、生け垣に囲まれた小さな公園があるだけだ。

コンクリートの低い塀でコの字型に囲まれたゴミ置き場は、綺麗なものだ。管理人さんがいとも丁寧に掃除される。

土曜日なので誰も姿を見せない。

それでゴミ置き場の右隅においた大きな方のソファに座つた。

ゆつくりと身体が沈んだ。

「長い間ありがとう」

ソファにそう言つてみた。

合成皮革の表面は少しざらつきだし、お尻はクッションがへたつていて座ると落ち込む。

電動でリクライニングになり、テレビを見る時も、斜めにしていた。

昼は、昼食の時に、毎日放送の『昼おび』か、朝日放送を見る。テーブルで食事を済ませると、ソファに移る。

斜めに倒して見ているといつの間にか寝ていることが多い。足先が少しはみ出すが、妻が毛布を掛けてくれている。

夕方、風呂から上がると食事とテレビタイム。

小さな方の背もたれは倒すとテールになる。直径十センチ程の窪みが二つあり、ここに水割りとスルメを置く。チビリチビリと舐めながら、レンタルビデオ屋さんで借りたDVDを見る。撮りためた録画を見る。お

気に入りはシーズン十二が始まった『相棒』だ。脚本が良い。個性的な主人公や登場人物、時には国家の巨大権力の影も見える設定。スピーディな展開。

主演の水谷豊と、変わつてきた寺脇康文、及川光博、成宮寛貴という相棒も面白い。

「役にたったなあ、ありがとう」とソファに呟いて深く息を吐いた。

十月下旬。今年は夏が猛烈に暑く、それが続いている。秋はどうやら少し顔を見せるだけのようだ。

天空を見上げた。

近畿は台風二十七号が既に南の海の上を通過して、雨は上がっている。

マンションの九階の部分の壁が目の前にあるが、頭の上は雲が勢いよく流れている。所々から青空が見える。

高層の雲は白く輝き、南東から北西に流れている。低層の灰色の雲は、北西から南東へ。

「あらら」

と少し首を痛くしながら見上げ続けた。

高層は北へ、低層は南へ雲が逆に動いている。綿毛のような雲が尾を引きながら。

それを見ていたら「ああ、大島はこれから雨なのか」と突然、なんとなく思ったのだ。

「早く捜索が進み、もう被害が出ませんように……」

十八年前の阪神淡路大震災から、私の意識は変わった。

昭和二十二年、戦後生まれの私は、もちろん戦争を知らない。個人的には二十歳前からいろいろと、まあ苦勞した部類に入れていただけのだろう。だが、世の中は高度成長で災害の記憶は殆どない。

世界を見ると、政治的には二

十世紀後半にはソ連邦が崩壊したり、二〇〇一年には「九・一テロ」が起きたりしている。自然災害も一九七六年には中国

東北の唐山地震で二十四万人の死者が出たりしている。が、日本では一九五九年の伊勢湾台風がすぐに出てくるくらいである。もちろん台風や地震や火山爆発などもあるのだが、私の生活からは遠い。伊勢湾台風の時はまだ十二歳である。

「自分の周りは災害とは無関係」という気分があった。生まれ育った神戸市は「固い岩盤の上に都市があるから大丈夫」などという神話を信じていた。

しかし、阪神淡路大震災はM

七・三という都市直下型地震であつた。最大震度は七に達したとされるが、明石市では震度六弱である。

因みに震度六弱というのは立つていることが困難になる揺れだ。

私は出勤前で布団から起き上がろうとして起きることができず、揺れに伴って身体が布団から前に押し出された。固定していない重い家具の多くが動いた。ピアノは斜めになり、パソコンのディスプレイはニメートルも吹っ飛んだ。当時液晶の薄いものはまだない。リビングの食器棚からは食器が飛び出して割れた。テレビなどはキャスター

付きのものであつたので転倒せずに済んだ。寝ていた和室は幸い家具がなかつたし、天井灯はダイレクトに固定する方式であつたから揺れてぶつかることはなかつた。停電と断水が起きた。断水はマンシヨンの貯水槽が壊れて一ヶ月も続いた。外部からはガスの漏れる臭いがしてきていた。三分ほどの距離にある上司の木造住宅は全壊した。マンシヨン本体は大丈夫だったが、細かいひび割れが生じた。

地震後、近くのスーパーというスーパーからものがなくなり、私は勤務先の姫路からリュックで食糧を買って帰った。

辛い肉親に死傷はなかつた

が、神戸では多くの知人が亡く
なった。

「人間一生のうちいろいろなあ
るものだ」と思った。

県に指導主事として出ていた
ので、業務の關係で東京の文科
省や厚労省に用務ができた。震
災後一ヶ月経っていた。それでも
いつもなら明石から四十分で着
く大阪まで、五時間かかった。
神戸市に隣接する明石市から
一旦西に出て、北にありが、福
知山線で大阪に出た。東京に着
くと厚労省の女性課長が「よく
きた」と涙を流して迎えて下さ
った。

三月になつて、今度は県の職
員として、神戸市長田区に派遣

された。生まれ育つたのは長田
区の北である。道が道でなくな
り、電線は垂れ下がつたままで、
家はただのガレキの山の連続に
なつていた。全国から応援が来
ていて、神奈川県警のパトカー
に乗せてもらつて避難所巡りを
した。

第二次大戦は知らないが、こ
のような光景が全国津々浦々
に広がつていたのであろう。

その一年後に胃ガンになつた。
胃の三分の二を切り取つた。震
災の時だつたら、多少の不調で
も検査など受けず、転移が進ん
で今頃、こんな文章を書いてい
ることはなかつただろうと思う。
「大島はこれから雨なのだ」

青空とパールグレイ色になり
つつある流れる雲を見ながら、
大きな息を吐いた。

青空の奥には漆黒の闇と無
数の星々が息づき、その虚空に
包まれて我々の空がある。この
空の向こうに大島がある。

東北の、我が目を疑つた巨大
な水の壁を、私が生きている六
十六年間の、歴史から見てほん
の僅かな時間に、しかと目に焼
き付けた。「いろんなことがある
ものだ：」ソファから立ち上が
つた。

青い空がゆらりと揺れて日の
光が全身に降りそそいだ。

大島はこれから雨かも知れ
ない。

出会いと別れの繰り返し

大西裕子

実習中に受け持った患者さんが亡くなった。「コミュニケーション不可」と言われていた患者さんだったが、毎日話しかけたり、手を握ったりするうちに少しずつ目を開いたり、手を握り返したりしてくれた。

「来週の火曜日に来ますね」

そう言つて別れたのが最後になった。

火曜日に病院に行くと、あの人のいたベッドに見知らぬ人がいた。病棟の患者表から名前が消えていた。

「退院したんだ」「転棟したんだ」

そう思いたかつたけど、現実は変わらなかつた。

患者さんの初めての死だった。涙が溢れて止まらなかつた。患者さんの本当に最後の時間を共有できた嬉しさと、人の儚さを実感した涙だった。

同じベッドにいる新しい患者さん。私はこの人の人生にどんな風に刻まれるんだろう。長い長い人生のほんの一瞬だけ、同じ時間を共有することができることに感謝しながら、挨拶をした。

※すばらしい体験ですね。

実にすばらしい人生ですね。この震えと哀しみと、ぼんやりとした希望のようなもの。それを伝えたいと思えますね…。 | 石川希理



霜の朝

夏子

秋の夜「逢いたい」とだけメール打つ

ときめいて君のメールを待つ 夜長

目覚めれば君のメールの着信音

君からのメールにハートマーク 冬

霜の朝 君からメール届く頃

君からのメール待つてる冬の星

※蒼い青い心のとときめきが。朽ちぬざわめきが。新しい機器の中に息づいているようですね。ー石川希理

◆ ショートショート

アクトス異聞

石川希理

博一は、本棚に最新のアクトスを置いた。
もうずいぶんになる。

「一二四号か……」

第二回東京オリンピックも昔に終わり、リニアモーターカーは大阪から九州博多まで延びている。人口は八千二百万人になり、七十歳以上の高齢者は半数を超えた。百歳以上の女性は五百万人を数えている。

「あのな、こつちは人口増で、なかなかええとこに入
れてもらえんのだや」

「亡者が多すぎて、走られへん」

「まだ、こないでええで」

仏壇から石川と柴田と塩見の声がした。
博一は頭をかきながら封筒を裏返した。

アクトス発行人、大西隆史の文字が笑っていた。

※

希理は大きなため息を落とした。

アクトスは四十号になった。

「ずっと気に掛かっているのだが……」

呟き声に皺が寄って空間に消えた。

アクトス賞というものを考えていたのだが、十年経つても実現しそうにない。

「アクトス文学賞」にしようかとも考えているが、何せ貧乏である。コバンザメ商法でひつついてくれる

出版社もない。

ま、第一号を自分にして、賞金は貰ったことにしておいてもかまわないが……。どうも卑屈だ。

「選考委員会もいるしなあ……」

言葉が凍り付いて剥げたカーペットの上に落ちた。

「そろそろ協力しようか」

高阪と塩見と柴田がニヤリとした。

「風呂の湯だけだな」

「つまり、湯（ゆう）だけか……」

でもまあ、そろそろ何とかしたいなあとは思っている。

※

『あのアクトス同人ですか』

記者の声が跳ね上がった。

なにせ平成三十年前後は、アクトスから芥川賞が二人、高阪・塩見とでている。直木賞に柴田がノミネートされ、日氏賞を隆史が受けている。

今度、日本女流新人文学賞は魅華らしい。また

角川俳句賞は彩華だ。朝日時代小説大賞は早蕨だし、日本エッセイスト・クラブ賞は明花がとつている。

同人になるには会員歴と会員の推薦・承認、もちろん高いレベルの力と受賞歴が必要で、競争率は二百倍以上と言われている。

「あなたは、はじめからアクトス同人」

「……」

「え、作つた人？」

「……」

「でも、作つただけじゃ同人にはなれないでしょう」

「……」

※

「めざせ、ノーヘル文学賞」

と言つていたのだが、もうだいたいぶ経つ。

なるほど、ノーは減つたが、文学賞はあと二、三回生まれ変わつても無理なようだ。

「でもまあ、最後は思うように生きた」

…と思うことにしている。

…なかなか人間、思うようにはいきられないものだ。バラモンからヒンドゥーに至るインドでは、四住期という人生区分があつて、学生期・家住期・林住期・遊行期という。十九年から二十年のスパンである。

男性中心のこの生き方は、四十歳くらいからは家族を捨てると言う事だ。がこれも昔の話。

いま日本に当てはめると、学生期・家住期・遊行期、それぞれ二十五年から二十七年だろうか。

林住期はない。遊行期は彷徨期だろう。あれこれしながら死に至る漠然とした時間を過ごす。

「あなたは遊行期？」

「いや、エンプティ期」

「なに、それ？」

「中味のない時期、まあ女性の、子どもが育つて生きる張りがなくなる空の巢症候群と似たようなものだ」

「でも女性はそれから女子会など遅しい」

「そ、男はしなびゆくのみ」

「哀れねえ」

「うん、ぐすん…」

秋風に乗つて冬の冷たい雪が運ばれてくる。
もうすぐその下に眠る…うむ…。



おんな、二人

高阪博一

夕暮れが迫ってきた都会のビジネス街。私はとあるカフェに腰を下ろし、香り豊かな珈琲を飲んでい
た。まだ、店内は疎らだった。

ふと見ると、二人のOL風の女性が入ってきて、隣の席に座った。珈琲を注文すると、密やかに喋り出した。どこか誘うようで、甘い声は、二人の豊かな肉体を想像させた。

「白いリングゴつて、性能が良くて、とつてもパワフルよ」

「いえ、いえ、私の黒いリングも、とつてもスピーディーで、痒い所に手が届くような感じだわ」

すると、先の女性が薄くルージユの付いた白いカツプの縁を拭き、艶やかな微笑みを投げかけて、言うのだった。

「やっぱり、何といつても、青いリングゴだわ。まだ、可愛いのに上手いのよ。きのう、寝られなかったもの」
偶には、こんな小話は如何でしょうか？

了

※落語の艶話のようで笑いました。でもまあ、もう私にとつては、遙か遠い昔の地球でのお話ですねえ。
おや、そんなことないつて……。ふーん。

―石川希理

広告

短編小説集

【コシーナ文庫】

エスプラネード



石川希理 著

梅花女子大学非常勤講師

◆2013年（平成25年）

12月1日・第1刷・発行

アマゾンからご注文いただけます。

定価678円（税込） **送料無料。**

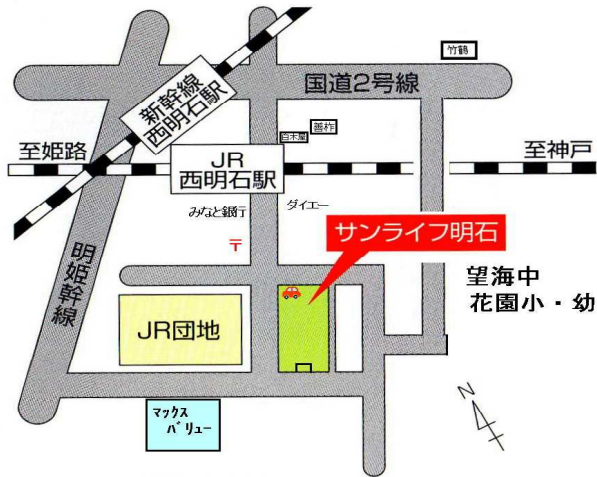
「エスプラネード」

独特の設定、構成で描かれた巧みな作品だ。短編小説は主人公の視点で書くのが常道だが、軽い認知症を疑われる主人公「私」は、意図的ではあるが、容易に昔の憎き上司の視点になったりもできる。

自宅から約4キロにわたる、過去にまつわるエスプラネード（遊歩道）で回想にふけり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その道は（ま、しゃあないか）と生きた私の、人生のエスプラネードでもあるという。そして意外な結末で終わる。諦めを感じる人生をセミドキュメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。

野元正・作家

「神戸新聞書評・二〇一三年三月三十日」



◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第22号)の原稿締め切りは3月末必着です。

■1月例会は18日(土)です。終了後、新年会の予定です。

◆3月例会は22(土)です。この例会のみ、第3土曜ではなく、第4土曜日の22日になります。ご注意ください。

◆HPに、21号までを、PDFファイルで掲載しました。
URL: <http://actos2008.o.oo7.jp/>
(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきます。)

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)


◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加できなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>

アクトス 第21号

第6巻第1号・通巻第25号

発行 平成二十六年二月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円